

# 子どもを評価に参画させて 自己評価力や自尊感情を育む

## 奈良県 御所市立葛小学校

御所市立葛小学校は、小規模校ゆえに、子どもの中で序列化が生じていたのが課題だった。そこで、興味・関心を喚起しやすい課題を設定すると共に、自己評価の場面を重視したところ、子どもが自分から積極的に考えるようになり、学力の序列も崩れてきたという。

### 背景・課題

- ◎少人数のため、子どもの意識の中で学力の序列が固定しやすかった
- ◎多人数でもまれる体験が少なく、活気に欠けている面もあった

### 評価に関する取り組み

- ◎知識の「再生」ではなく、知識を組み合わせるような課題を出す
- ◎目標から考えた課題を設定する
- ◎学習の成果を客観的に自己評価する場を設ける
- ◎複雑な思考が出来るように、学年に応じた方法を取り入れる

### 成果

- ◎学力の序列ではなく、自分自身の成長に目が向くようになった
- ◎子どもが積極的に発言するようになり、話し合いが活発になった
- ◎教師が子どもの気持ちや意欲をよく見取るようになり、授業が改善された

### S c h o o l D a t a

◎御所市立朝町小学校と戸毛小学校が統合して、1982（昭和57）年に開校。同市立葛中学校と同じ敷地内にあり、4・3・2年間のブロックを設けて小中一貫教育に力を注いでいる



校長 丸山恒央先生

児童数 70人 学級数 7学級（うち特別支援学級1）

所在地 〒639-2252 奈良県御所市樋野270

TEL 0745-67-1448

URL なし

公開研究会 未定

### 背景

### じっくり考える課題で 二元関係の序列化を崩す

のどかな農村地帯に位置する御所市立葛小学校は、全校児童70人という小規模校だ。昔から教育熱心な地域であり、塾に通う子どもも多く、多い年には卒業生の3割程度が私立中学校に進学する。子どもは全体的に穏やかで朗らかな性格だが、少人数のために人間関係が固定化しやすいことが地域的な課題だと丸山恒央校長は話す。

「多人数の中でもまれる体験が少ないためか、子どもたちは少し活気に欠けているよう

# 子どもが伸びる学習評価

です。少人数ゆえに、子どもの中で学力などの序列が出来やすいことも課題でした」

子どもの序列化を崩し、それぞれの可能性を伸ばしていくためには、自己評価の機会を設けて、自尊心を高めることが必要ではないか。そうした考えから始めたのが「パフォーマンス課題」だ。児童・生徒支援教員の福本義久先生は次のように話す。

「パフォーマンス課題は『子どもの思考を可視化する課題』と捉えています。子どもにも、『君たちが考えていることを全て出してもらおうための問題』と説明しています」

例えば、「発芽に必要な条件を答えよ」は知識を問う問題であり、知っていれば答えられる。一方、パフォーマンス課題は「店で売っている種子は、そのままではなぜ発芽しないのか」というように、学んだ知識を用いて説明することが求められる。そのため、発芽の条件を知っている子どもでもなかなか説明できないと、福本先生は話す。

「知識を『再生』するのが得意で、発芽の条件をすぐに答えられたとしても、『思考』が得意とは限りません。逆に、『再生』は苦手でも、知識を組み合わせて『思考』することが得意な子どももいます。このような力を引き出し、目に見えるようにするのがパフォーマンス課題です。従来の授業では、教師が子どもに対して再生力や記憶力を求めているというメッセージを発信してしまっ

たことが、思考力・判断力・表現力を伸ばせない要因だったのではないかと思います」

## 評価の工夫①

### 目標から考えた課題で学びの焦点を絞り評価をしやすくする

課題は子どもに付けたい力から考えて設定するように工夫している。

「教師自身が『最終的に子どもに何を理解させるか』を端的に言語化できなければ、本来、課題は設定できないはず。最終目標から逆算して考えて課題を設定することによって、子どもが何をどこまで理解したかが分かりやすくなり、適切な評価が出来るようになります。評価は子どもの育ちへのまなざしと考えています」（福本先生）

2011年度に新採で赴任した中尾真也先生は、目標から考えて授業づくりをするようになって、授業が大きく変わったと話す。

「当初、私は『自分はこう教えたい』という意識で授業をしていましたが、授業のねらいが絞り切れず、子どもは授業に集中できていませんでした。福本先生に、まず『子どもに何を学ばせるか』という1点を明確にし、それから『授業の振り返りで子どもに書いてほしいこと』を想定し、授業の展開を考えると良いと言われました。そのように授業構成を改めたところ、子どもが積極的に発言するようになりました。話し合いが活発になった



御所市立葛小学校校長  
**丸山恒央** まるやま・つねひ

「教育者として、自分自身の人となりや生き方を常に見直し、謙虚であり続けたい」



御所市立葛小学校  
**福本義久** ふくもと・よしひさ

児童・生徒支援教員、理科専科。「子どもが『力を付ける場』から『力を発揮できる場』に学校を変えたい」



御所市立葛小学校  
**中尾真也** なかお・しんや

3学年担任。「自分らしさを忘れずに、夢に向かって諦めない子どもを育てたい」

ことは、学級運営にも好影響を与えています。課題の内容は、子どもの関心を高め、課題を身近に感じさせるために、社会の出来事やテレビの人気番組を題材とすることがある（P.16図1）。福本先生は小学生向けのテレビ番組を見て、そこから課題のヒントを得ることも多いという。

## 評価の工夫②

### 学習を自己評価させて 次の授業への意欲を育む

課題が終わると、クラス全員分のパフォーマンスをコピーして配布し、その中から「ベストワーク」を決める。課題の達成にはどのような条件がそろっていればよいかを「ジャッジの基準」として子どもたちに出し

合わせた上で、それに基づいて最も良いと思うものを選び、根拠も記入する(図2)。

『ジャッジの基準』として、子どもは課題解決のポイントをもう一度考えることとなります。この過程によって、自分のワークはどうか良かったか、どこが足りなかったか、自己評価が出来ます。『次はここに気を付けて、自分がベストワークに選ばれたい』という学習の動機付けにもなります(福本先生)

もう1つ重要な点は、この自己評価がクラスの学力の「序列」を崩していることだ。

図1 6年生理科の「パフォーマンス課題」の例

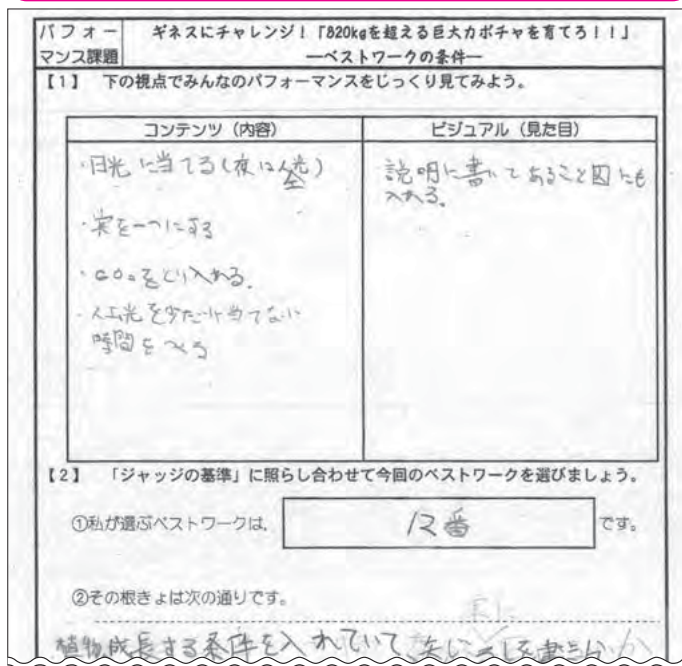


ギネス記録を題材としたパフォーマンス課題。単元の最初に課題を示すことで、子どもは課題を解決するために必要な知識を得ようと、授業に積極的に取り組む  
\*同校の資料をそのまま掲載

「誰かと比べての優劣ではなく、自分自身の学習に目が向くことで、クラス内の序列は気にならなくなります。実際、ベストワークに選ばれる子どもは課題によって違います。知識を組み合わせた抽出したり、それを分かりやすく説明したりする力は、従来の『再生』の序列とはあまり関係がなく、子どもの関心や集中力などが大きくかわっていることを実感します」(福本先生)

パフォーマンス課題は主に5・6年生が対象で、低・中学年の時期はその基盤となる力の育成に力を入れる。例えば、低学年で書くひまわりの観察日記では、それを4コマ漫画

図2 パフォーマンス課題後に行う「ベストワークの条件」



課題後、子どもが評価規準を話し合い、それに照らしてベストワークを選ぶ。自己評価の場として、同校が重視する子どもを評価に参画させる取り組みだ  
\*同校の資料をそのまま掲載

に合せて書こうとする傾向があるため、大きな紙では余白を埋めようとして繰り返し同じ説明をしたり、ポイントとずれた内容を書いたりして、最も大切なことを焦点化できていないことがあります。これを防ぐために、意図的に小さい用紙を配布して、大切なことだけ書けるようにしています」

**成果**  
**成果物をデジタル化し**  
**自己評価をしやすくする**

パフォーマンス課題を取り入れた結果、子ども内の序列が崩れ、自己評価によって自分

風に表現させる。子どもは、「種をまく」「発芽する」「花が咲く」「枯れる」といったポイントを描いて重要情報を焦点化して組み立てるための訓練の1つになる。

中学年では、その時間に学んだ内容を写真サイズの小さなカードにまとめる(写真)。

「子どもは用紙



## 子どもが伸びる学習評価

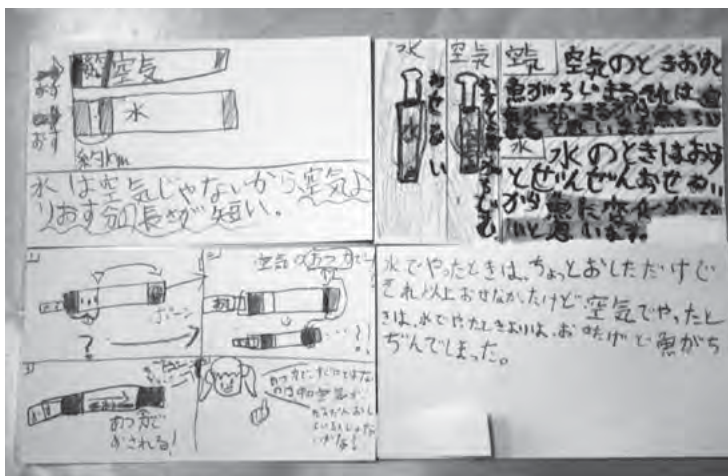


写真 4年生の理科で実験の結果をまとめたカード（4人分を掲載）。子どもによって、4コマ漫画を描いたり、文章だけで説明したりと表現方法は異なる \*同校の資料をそのまま掲載

を高めようとする意識が育ってきた。事後アンケートでも、大半の子どもが「学習したこと」や「自分のパフォーマンスの良さや足りないこと」が「よく分かった」と答えている。「他者からの評価が中心となるのは学校に通う時期だけで、社会に出ると上司などの評価はありますが、自己評価でできる力が強く求められます。そうした力を小学校から付けさせたいという思いがあります」（福本先生）

今後、充実させたいと考えているのが「デジタルポートフォリオ」だ。一人ひとりにSDカードを持たせ、国語の音読、体育や音楽

のパフォーマンス、図工の作品といった画像や動画、音声を記録するものだ。例えば、音読は、誰かに聞いてもらうよりも、自分の音読の様子を動画で見ることが、もっと良くしたい点が意識でき、成長も実感しやすいと考える。

一連の取り組みを振り返り、丸山校長は次のように話す。

「教職歴が長いほど、自分の指導の型をつくってしまう傾向があるのは否めません。『子どものために』と考え、あれもこれもと詰め込み式になり、逆に子どもを勉強嫌いにさせてしまうこともあります。パフォーマンス課題に取り組んだことは、教師が自分の型を崩し、子どもの気持ちや意欲を優先する指導を考えるきっかけになったと思います」

また、パフォーマンス課題を教師それぞれが得意な教科から始めることもポイントだと言う。教師自身が子どもの変化を実感し、楽しめることが継続的な取り組みにつながるからだ。

「私は理科で取り入れています。別の教科の授業でも、子どもが『端的に言う』といった説明が出来るようになったり、『組み合わせで考えよう』という発想が出たりするようになりました」（福本先生）

同校は、出来ることから始め、子どもの成長を確認しながら実践内容を進化させていくという方針を、これからも続けていく考えだ。

### 学校をつくり、動かすチームワーク

#### 校長の役割

私が大切にしているのは、先生方との日常的な雑談です。私の教育に対する思いが伝わり、それが教育活動に反映されたらうれしいですね。

先生方の多くは偏差値競争を勝ち抜いて教師になったわけですが、その価値観から抜け出し、子どもに学びの楽しさを感じさせ、子どもを育む喜びを体験してほしい。そのためにも、私も先生方も、子どもの心を知りたいと思っています。

校長 丸山恒央先生

#### ミドルリーダーの役割

校長先生が示した学校経営方針を具現化していくのが、私の役割だと考えています。方針に対する解釈は、先生によって違うこともあります。そこで、まず私が実践して結果を見せて、何が求められているのかを具体的に示します。そして、課題を先生方と一緒に考えていくようにしています。

また、必要に応じて「研究通信」を発行し、研究内容を伝えて目線合わせをするように心掛けています。

児童・生徒支援教員 福本義久先生